The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	プガチョーフの乱におけるツァーリ幻想
Author(s)	中村, 仁志
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1980, 14, p. 51-70
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48018
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

プガチョーフの乱におけるツァーリ幻想

中村仁志

一

一七七三年九月、エカテリーナ二世の統治下にあるロシア帝国の東南の一隅を占めるヤイーク地方に、「われこそは、『亡くなられた』と言われているピョートル三世である」と僭称する人物が出現した。「真正のツァーリ」たる自分に対する忠誠を求める彼、ドン・カザーク、エメリヤーン・イヴァーノヴィチ・プガチョーフの呼びかけに応じ、まずヤイーク・カザークが、ついで辺境の非ロシア人、ロシア人農民などが陸続とその旗下に参集した。クングール近郊のスパースコエ村の住民がプガチョーフに送った報告の一節はこの時の民衆の心情をよく伝えている。「われらが赤いお天道様は、長い間、地の底にお隠れになっていたが、今や東から全世界へと昇り、その慈悲で、われら、卑しき寄る辺なき奴隷どもを暖めようとされている。」(1)

ここに見られるような民衆のツァーリに対する期待、その善良さに寄せる盲目的信頼＝ツァーリ幻想は、ロシア農民戦争の重要な一特質としてソビエトの歴史家のみならず民俗学者、宗教史家をも含む研究者の関心の的となっ

てきた。[2] わが国のロシア史学界においても、論稿中にこのツァーリ幻想の問題についての言及がなされたことは一再にとどまらない。[3]

しかしながら、従来の研究、なかでもソビエトにおけるそれでは、ツァーリ幻想の問題は専ら民衆を革命に導くべき政治思想としての有効性という面からのみ捉えられている。ここでソビエトの研究者の代表的見解を要約すると、次のようになる。ロシア農村の家父長制にその根をもつ「良きツァーリ」という表象は、一八世紀においては当時の最も先進的な思想家たる啓蒙主義者の夢想した「王座の上の哲人」と比べても、さほど劣ったものではなかった。[4] 特に「良きツァーリ」の名を僭称することは、民衆を反乱にひきこむためには「不可欠の戦略的手段」[5]でさえあった。しかし、後代の革命思想（とりわけ「マルクス＝レーニン主義」）と比べる時、ツァーリ幻想の思想的未成熟、後進性は覆うべくもない。それ故、農民戦争は新体制へのプログラムを提出できず敗れさった、とされる。

ソビエトの研究者の多くは分析を右の点にしぼっており、反乱中の民衆の具体的行動とツァーリ幻想との関係について触れることはほとんどない。ツァーリ幻想という政治思想の「後進性」を批判しつつ、それは反封建闘争に決起した人民大衆の「英雄的行動」と矛盾なく両立するものとする。この立場を端的に示しているのがチェレプニーンの「ツァーリの助けに対するユートピア的信頼は、農奴制のくびきとツァーリ権力の恣意に対する彼ら（農民）の積極的行動を決して麻痺させなかった」[6]という言葉である。

われわれの研究は、このようにツァーリ幻想と反徒の行動とを無関係なものとして捉える「分離主義」に対して疑問を提出することからはじまる。歴史的に形成されたツァーリ幻想は民衆のパーソナリティの一部として彼らの行動に強い掣肘を加えたと考えられるのであり、その意味において、ツァーリ幻想の問題は反乱中の民衆の行動と

「分離」して考察できるものではない。本稿は民衆を革命に導くべき政治思想としての有効性うんぬんといった観点からではなく、反乱中の民衆の行動への影響関係という観点からツァーリ幻想に光をあてなおすことを目的としている。

二

プガチョーフの乱（一七七三―一七七五年の農民戦争）への参加者は約三百万人と概算されている。[7] かくも多大な人数がピョートル三世＝プガチョーフの旗下にはいったことをツァーリ幻想の面から説明する際には、民衆のツァーリへの期待と並んでピョートル三世＝プガチョーフという表象がもっていた魅力について考えあわすことが必要となろう。そこで、本章においてはピョートル三世＝プガチョーフが民衆に対してもっていた魅力の根源を探り、プガチョーフの示した「ツァーリらしさ」の内容を明らかにしていきたい。その際、問題を、(1) ピョートル三世の人気、(2) プガチョーフの働きかけ、の二点に分けて述べるのが適当と思われる。

まずピョートル三世本人につき、その伝記を概略し、あわせて彼の人気の原因に触れよう。ピョートル三世は、一七二八年、ホルシュタイン公と彼に嫁したピョートル一世の娘アンナの子として生まれ、一七四二年、叔母のエリザヴェータ女帝によりロシア帝位後継者に指名された。ロシアにおもむいた彼は、その後二十年間、エリザヴェータの下で皇太子の座を占めることになる。民俗学者チストーフによれば、この皇太子期こそが後のピョートル三世伝説を育む揺籃期となった。家父長制的な一八世紀ロシアにおいては社会的不平等、国の乱れのもとは、女が国を統治しているためと考えられており、未来のピョートル三世たる皇太子には、一七二五年以来続いた「女帝時代」

を終焉させ、「正当な」支配秩序を回復させる存在としての期待がかけられていた。そのため、彼の王座への待機期間が二十年の長きにわたった間に、民衆の心には「良きツァーリ」の候補として理想化された彼のイメージが定着するにいたったというのである。[8]

こうしてその即位を鶴首されつつ一七六一年、王座に即いたピョートル三世は、貴族の勤務義務の解除という、民衆の目には貴族支配からの解放への第一歩と映じた改革[9]を実施した後、はやくも一七六二年には、ロシアの国益を無視した親プロイセン政策のため、妻(後のエカテリーナ二世)を中心とした反対派により廃位・暗殺されてしまう。しかし、民衆は自分の希望の星が墜ちたことを容易に信じようとしなかった。その結果、ピョートル三世は貴族の次に農民の解放を企てたため貴族の手で廃位されたが、亡くなってはおらず、逃れてどこかに潜んでおり、やがて姿を現わす、という噂が巷間に広まりだした。[10]これが、ピョートル三世伝説の端緒である。

プガチョーフは右に述べたような理由で理想化されていたツァーリの名を僭称したのであり、彼の成功、驚くべき民衆動員力の一端はピョートル三世の人気により説明できる。しかしながら、その際、民衆の求めていたピョートル三世とは、現実のそれではなく、彼らの心の中で「理想のツァーリ」として結晶化された存在であったということを忘れるべきではない。プガチョーフは、なるほどピョートル三世の名を騙りはしたが、もし彼が民衆のイメージの中にあるピョートル三世と違った行動をとったのならツァーリとして民衆に臨むことはできなかったであろう。プガチョーフがピョートル三世として民衆を支配するということは、とりもなおさず、彼自身が民衆のピョートル三世像に支配され、その挙動をツァーリとしてあるべき行動の枠内に制せられるということでもあった。そこで以下、プガチョーフが「真正のピョートル三世、良きツァーリ」としてのイメージを民衆の心に焼きつけるため、

いかなる行動をとったかを見ていこう。

民衆にとり「良きツァーリ」とは、この世における神の代理人として自分の希望を慈父の如くかなえてくれる存在のはずであった。それ故、プガチョーフも彼らの期待に応えるべく、種々の慈悲を恵み与えることを約束している。まず徴税、徴兵の廃止が宣せられた。「国庫に対する人頭税その他の税支払いの要求および新兵徴募から解放する」[11]と。同時に、それまで専売制が敷かれ民衆に高値で売られていた塩の自由生産・販売が許され[12]、居酒屋が無料で解放され、金銭が気前よくばらまかれた[13]。

さらに、ピョートル三世の名で出された布告は民衆が生活していくうえで不可欠のものとして欲していた物質的基盤の数々を与えている。その代表的な例としては、河・土地・草原・弾丸・火薬・穀物・森・水・漁・海などがあげられる[14]。

また、プガチョーフは農民を地主制の桎梏から解放し、これに自由を与えた。その際、注意すべきは、当時にあっては解放＝自由化とは地主に所有される境遇（＝非自由）よりはなれ、ツァーリの支配下にはいることを意味しており、プガチョーフも正にかかる意味での自由化を宣したということである。彼の布告にいわく、「君主にして父なる予の慈悲をもって、この布告により、かつて農民身分、すなわち地主の支配下にあった者を、すべて予の王座に忠良な奴隷とする」[15]と。これに対して民衆の側からも、一農民ウリヤーン・フィラートフの言葉、「ありがたいことに、旦那の物になっていなきゃならないのも、そう長いことじゃない。というのも、今にピョートル・フョードロヴィチ（三世）が、わしらのもとへおいでになって百姓をみな自分の物にし、旦那らを吊し首にしてくださるからだ」[16]に代表される如く、喜びの声が聞かれた。

宗教に関しても、プガチョーフはギリシア正教内の異端たる分離派や非ロシア人回教徒に信仰の自由を与え、これまで宗教的迫害を被ってきた彼らの目に自分を「解放者＝ツァーリ」と映らせたのである。[17]

このように、プガチョーフは種々の慈悲を約束することにより、「良きツァーリ」らしさを示そうと努めた。しかしながら、真のツァーリらしさとは善良さの中にのみ存在するものではない。父の如き慈悲の深さと並んで、「正義を守る君主としての正当な怒り」があってこそ、ツァーリの権威は保たれるのである。プガチョーフは、この「怒れるツァーリ」としての面を示すことも忘れなかった。彼の発した布告には慈悲を与えるとの約束と並んで、「もし汝らが予の布告に逆らうようなことがあれば、たちまち予の正当な怒りが降り下るのを感じることになろう。何人たりといえども、われらが至高の造物主の御力と予の怒りを免れることはできない。汝らは予の強力な腕から逃れることはできないのである」[18]とか、それに類する一文が見受けられる。また、禁令を犯した者の処刑は公開でおこなうよう指示されたが、これも他の者に恐怖を与え、その忠誠をより確かなものにするためそうされたのであった。[19]

以上で述べてきた如く、プガチョーフが民衆に対するイメージ操作に力をいれたのも、結局、彼の実力のなさの故であった。政府軍と戦うプガチョーフは、いわば狼に立ち向う狐であり、彼一人では勝ち目はなかった。狐はライオン（ツァーリ）の皮を被ることによって自分の権威を高め、群羊（民衆）を駆って狼に当たらせようとしたのである。これに対して政府側は、当然のことながら、この偽ライオンの皮を剝ぎ狐の正体を暴露しようとした。政府は新たに出現したピョートル三世の正体が逃亡カザークのプガチョーフであることを宣伝し民衆に幻滅を与えようとしたのである。それ故、プガチョーフとしては自分が「真の」ツァーリ・ピョートル三世たることを示すにや

ぶさかではありえず、手段を尽して本物であることを証拠だてようとした。彼はツァーリの名で発した布告や勅令をエカテリーナ二世の法典に典型的な表現や用語で粉飾して公文書としての体裁を整えた。[20] また彼の側近は政府側の顕官に擬され、チェルヌイショーフ伯とかパーニン伯とか呼ばれるようになった。[21] さらにプガチョーフは「息子パーヴェル」（ピョートル三世とエカテリーナ二世の息子。後のパーヴェル一世）のことを不憫がって涙を見せることまでしたが、それも彼の言によると「下々の者に自分をもっと信用させるため」[22] そうしたのである。

このように、プガチョーフは委曲を尽して自分が「真正のピョートル三世、良きツァーリ」たることを民衆に示し、彼らを反乱に動員しようとしたのであった。

三

前章においてわれわれが見てきた如く、プガチョーフは自分と民衆の心の中にあるピョートル三世像との懸隔を縮めんがため尽力した。これに対して、民衆の方は新たに出現したピョートル三世をどのように見ていたのであろうか。その問題について、プガチョーフの乱中に流れた一連のデマを分析の俎上にのぼせつつ、検討を加えていきたい。そこで、まずデマの情報としての特性について一言することが必要となるが、一体、デマとは何であろう。ここでは、それを「事実に基づかない根拠なき情報」と定義しておく。[23] デマは情報の根拠たる事実の機械的伝達ではなく、伝達者の価値判断、願望等によって改変された情報である。その意味において、デマは「虚偽」なのであるが、逆にいえば、そのためにこそ、かえって伝達者の意識の深層を「正しく」映しだす鏡となっているともいえよう。けだし、デマにおける事実の歪曲の方向を決定する主因は、他ならぬ伝達者の意識、願望なのであるから。

以上のような理由により、われわれがプガチョーフの乱における民衆のピョートル三世観を明らかにするうえでデマを依拠すべき分析の対象として選んだのも、あながち不当ではないと思われる。それでは以下、プガチョーフの乱に際して流れたツァーリ・ピョートル三世関係のデマを内容別に整理していこう。

まず目にとまるのが「新たに出現したピョートル三世は本物である」という内容をもつデマである。これの典型的な例としては、ピョートル三世の妻たるエカテリーナ二世が「例の人物」を真の自分の夫、ピョートルと認めている、というデマがある。女帝はピョートル三世を名のっている人物の正体はドン・カザークのプガチョーフである旨を宣した布告を発したが、その内容は民衆によって曲解された。布告はプガチョーフのことを「悪党」と呼ぶように命じていたにもかかわらず、「女帝は、あの方のことを『バルト諸島公』とか『ホルシュタイン公』（前述した如く、ピョートル三世の生家はホルシュタイン公家であった）とか呼ぶように命じられた」というデマが広まったのである。[24] 民衆のこのような反応は特に反乱の初期に顕著であったが、それは、この時期にはまだ政府が反乱の討伐に全力をあげなかったのがピョートル三世への遠慮とみなされたためである。たとえば反乱勃発後、約三ケ月経たころ、「もし、あの方が陛下でなく、逃亡カザークであるのなら、当然ずっと前にモスクワやペテルブールクから女帝陛下の軍勢が派遣されてきているはずだ。しかるに三ケ月過ぎても、そのようなものは派遣されていない。とすれば、あの方は本物のピョートル三世陛下であるにちがいない」と言われたのである。[25]

また、エカテリーナ二世と並んで貴族の一部も「再出現したピョートル三世」を本物と認めたというデマも注目に値する。噂によれば、エカテリーナ二世はピョートル三世の真偽を確かめさせるためパーニン伯を反乱地域に送ったが、はたしてパーニンはこれを本物と認めたという。[26] さらに、一七七四年四月に急死した政府軍の総司令官ビ

ービコフの死因についても、ビービコフはピョートル三世と対面し、これが本物であることを知って恐怖に駆られ服毒自殺したのだというデマが流れた[27]。

このように「貴族がピョートル三世を本物と認めた」というデマが存在した以上、「貴族の中にもピョートル三世に仕える者がいる」というデマが流れたとしても不思議ではない。実際、前述のパーニン伯が「パンと塩（恭順の印）をもってピョートル三世に会いに行く」[28]とか「カザーニからさる将軍が兵四万を連れて陛下に臣従しにきた」[29]とかいうデマも流布されたのである。

以上あげてきた例からもうかがえる通り、民衆は、一七六二年のピョートル三世廃位の下手人であり、それ故、実際には彼の復活など認めようはずもないエカテリーナ二世や貴族にすら「新たに出現したピョートル三世」を本物と認めさせようとした。これをもってしても、ピョートル三世の再出現を願う民衆の思いが、いかにも急であったことがうかがえるであろう。

さらに民衆はピョートル三世が彼らを解放してくれるに足る実力を備えていることを希求した。次にあげる「ピョートル三世は強く、勝利する」という一連のデマなどは正にかかる願望の結果したものと考えられる。この種のデマは具体的には兵力の誇張や架空の勝利・戦果の捏造といった形で現われた。まず兵力の誇張からいうと、一七七四年五月に流布された「陛下の軍三万がウファーに派遣された」[30]とか「ビョールダ（四月まで反徒の本陣があった）には四万、ウファーには一万の兵がいる」[31]とかいう噂がそれにあたる。実際には、この時期、反徒は政府軍に敗れた直後であり、その兵力は数千どまりにまで落ちこんでいたのであった。

また同じころ、「敵の将軍を撃破した」というデマも広められた。一七七四年四月、反徒陣営においては「ゴリ

ーツィン将軍が陛下に敗れ（事実はその逆）、逃走中であるからこれを捕えよ」[32]とか「ミヘリソーン中佐（プガチョーフを長駆追撃し、これに最後の一撃を加えた）が陛下に敗れ、逃走中である。かの者を連行した者には三百ルーブリが与えられる」[33]というデマが流れたのである。

これ以外にも、シベリヤ県やオレンブールク、ウファー、サマーラ、カザーニ、ニージニー・ノーヴゴロト、チリャービンスク等といった要所が、実際には一度も反徒の手に渡ったことがないにもかかわらず、ピョートル三世および彼の息子のパーヴェルに臣従していると言われた。[34]

以上、述べてきた如く、プガチョーフの乱に際しては「新たに出現したピョートル三世」に関して、「彼は本物である」および「彼は勝利する」という二様のデマが流れた。このことは当時の民衆の理想のツァーリ像を探るうえで示唆するところ大であると思われる。民衆は自分に土地・自由・河・草等を与えてくれる「良きツァーリ」を、デマにおいて「真正のピョートル三世、強いツァーリ」として描こうとした。すなわち、彼らにとってツァーリは「善良・真正・強力」の三要素が互いに不可分の一体――ゲシュタルト――を構成する存在として認知されていたのである。そして、これらの三要素は「ツァーリは地上における神の代理人である」というギリシア正教に基づく政治神学的抽象的ツァーリ観の民衆的表現形式ではなかったかと推測される。「新たに出現したピョートル三世」が本物であるということは、彼が神によって正統の支配者と定められたツァーリの一門に属していること、すなわち、彼が「真正の」神の代理人たることを意味する。その彼は神に代って地上に善を施す「良き」存在であり、また、神の加護を受けているが故に「キリストの教えに背いた貴族」[35]などに敗れるはずがない、「強い」存在でもある。

民衆のデマはピョートル三世＝プガチョーフを右に述べたような「真・善・強」を兼備した理想のツァーリの地位にまで祭り上げるものであった。その結果、民衆は「強いツァーリ」のもとでの貴族支配からの解放の可能性を信じることができるようになった。このことは彼らが反乱に大量に動員されるうえで看過できぬ意義をもったと思われる。「勝利するツァーリ」という表象は、反乱への参加者の増大という面からすれば、反乱者側に大いに資することとなったのである。

しかしながら、このような形での反乱参加――解放者＝ツァーリの支配下にはいる――は、必然的に、自らを解放されるべき客体として認識する態度を招来する。ピョートル三世の旗下にはいった反徒は解放運動の主体としての能動的姿勢を失い、自分の上にある権威（良きツァーリ）にすがることにより自己の運命を決していこうとするようになっていった。以下、かかる「権威主義的態度」の反乱における具体的発現形態について論じていきたい。

四

前章の終りで述べた権威主義的態度はプガチョーフの乱の間、民衆の行動の諸側面に影響を及ぼした。たとえば、反乱によって地主支配体制が一時的に崩壊した危機的状況に臨んで、農民が、自分がそれに則して行動するべき新原理の提出をピョートル三世＝プガチョーフに求めたのはその好例といえるであろう。一七七四年七月、アラートウィリ郡、アルフィリエフ村の農民がプガチョーフに対して書き送った書状にいわく、「慈悲深きピョートル・フョードロヴィチ陛下に謹んで御願いいたします。なにとぞ、わたしどもがいかなる土台の上に立っているのか示してくださるよう御配慮ください。わたしどもには、何をなすべきなのか見当がつきません。陛下は部隊を送ってく

ださりはしましたが、（行動指針に関しては）何の御沙汰も示しておられません。[36]」

右の如く「陛下の御沙汰」によって諸事を決していこうとする態度は、管理人や地主に対する復讐に際しても見られた。農民は、これらの者を捕縛して旧原理（地主の支配）を覆しながら、捕えた者の処分については自ら決裁することなく、これを「陛下」のもとへ連行しその存分にまかせようとしたのである。[37]

民衆は彼らが地上における最高の権威として認める「良きツァーリ」に服従することを望んだ。僭称はこのような態度に適合した扇動形態であったため反乱への大動員が達成された。しかしながら、その場合には民衆の反乱参加が自分自身のイニシアティブによるものというよりもピョートル三世の命に従うという受動的態度での参加になるのもやむをえざることであった。その結果、民衆を反乱に決起させるためには外部からの強力な刺激が必要となる場合がしばしば見られた。たとえば、ウラールの工場地帯のいくつかの工場の者たちは反乱軍の到着を自分が反乱に参加するための必須の条件と考えており、部隊が到着するまでは自発的に決起しようとはしなかった。[38] また一部の工場の者たちが反乱に参加しなかったのも、部隊の到着という決定的な刺激を欠いたがためであったといわれる。[39]

農民にしても、プガチョーフのもとへ使者を送るか、あるいは彼のもとより送られてきた使者を受け入れるかして「ピョートル三世」に服属した際には急速かつ大量に反乱に参加したが、それと反対にピョートル三世＝プガチョーフが遠方へ去って彼の支配が感じられなくなった場合には潮の引く如く反乱から離脱していった。プガチョーフの率いる「大陸軍」（反徒の主力部隊）が去った後のカーマ河沿岸地方の状況はその好例である。この地域に残留していた反徒の首領バフチアル・カンカーエフは戦線を離脱した逃亡者の捜索・連れ戻しに骨をおるはめとなり、[40]

彼の部下のアブドゥーラ・ムスターエフも当地の人心のうつろいやすさを嘆じなければならなかったのである。[41]

また、これと同じような現象は敗戦の直後にも生じた。反乱軍部隊が大打撃を受けたり、政府軍によって要所が奪回されたりした後には四方の村より反乱に参加した農民がその非を悔い、改悛を誓いにきたのである。一七七四年一月、ビービコフ大佐（前述した総司令官ビービコフの甥）の率いる政府軍がザイーンスクを占領した翌日には二二の村から農民の代表が到着し、恭順の意を表した。[42] 同月、ピャニー・ボールで政府軍が勝利を収めた時にも、一昼夜の内に四〇の村の代表が前非を悔いに現われた。[43] その後三月に政府軍がバシキリヤで反乱軍を撃破した際には赦免を願いにくる者が引きも切らなかったばかりか、政府側に寝返って「必要とあらば、悪党ども（反徒）と戦う用意もございます」と申し出る者すらあった。[44] また、この時には反乱軍から大量の脱走者がでたため、反乱軍指導部は各地の哨所に「軍から出てきた者は、通行鑑札の所持・不所持に拘わりなく通過させず、軍に送り返せ」[45]と指令せねばならなかった。

敗軍に脱走者が多いのは、ある程度は、一般的傾向ないし常識として説明されよう。しかし、民衆の反乱軍への離合集散がツァーリ・ピョートル三世の去来と符節を合わせていたという事情を考えあわせると、プガチョーフの乱における大量降服・脱走は反徒の権威主義的態度と無関係ではなかったように思われる。民衆は自分が「真正の、良き、強いツァーリ」とみなす人物に従って反乱に参加した。しかるに、その「強い」はずのツァーリが裏切り貴族の軍に惨敗を喫してツァーリとしての威厳を傷つけてしまえば、彼の権威は民衆の行動を誘導するだけの力をもたなくなってしまう。その時、もともと「内からの」内発的動機づけによるというよりは「外からの」誘導力により反乱に駆りたてられていた反徒にとり、戦いを続けるべき動因が消滅し、反乱からの大量離脱の条件が生じるの

である。

以上、反乱者の行動の諸側面を彼らの権威主義的態度とからめて論じてきた。伝統的な支配秩序（ギリシア正教のもとでの貴族＝地主による農民支配）の中で生まれ、育ち、そのような場に適合した存在として自らのアイデンティティーを形成してきたロシアの民衆にとっては、自分の社会的役割は「服従者」として認知さるべきものであった。そしてこの「服従者」としての役割規定・意識は、農民反乱・戦争という特殊・異常な場においても彼らの行動の諸側面を規定する要因となったのである。

五

プガチョーフの乱は、その当時のロシアの朝野を震撼させたばかりでなく、後代の革命家・思想家・知識人の思考にも大きな影響を与えた。一八二五年に決起した貴族革命家デカブリストにとっては、プガチョーフの乱は革命に際して避くべき「流血の惨事」であったが、その後、ゲールツェンやチェルヌィシェーフスキー、バクーニン等といった農民社会主義を目ざした人々は乱の革命的性格を強調するようになる。ツァーリ幻想の面からいうと、ナロードニキが僭称の戦術的有効性に着目し、「人民の中へ」はいり込む際に反乱を呼びかけるアレクサンドル二世の偽布告をもち込んだことが注目に値しよう。

十月革命以後は、プガチョーフの乱を階級闘争＝一七七三－一七七五年の農民戦争と見る視点が基礎となり、その上に立って乱の諸側面に関する研究がおこなわれるようになった。この視角においては、ツァーリ幻想の問題が専ら民衆を革命に導くうえでの有効性の面からのみ捉えられてきたことは、はじめに述べた通りである。これに

対して、われわれは「反乱中の民衆の行動に与えた影響」という面に焦点をあててツァーリ幻想を論じてきた。以下、そこから得られた結論をまとめてみよう。

長い歴史的経過のうちに形成されてきた「神の代理人たる良きツァーリ」という観念は、一八世紀においても民衆の中に生きていた。彼らの意識においては、いつの日か「良きツァーリ」が現われて全ロシアの帝位に即き、ツァーリの善意が民衆に達するのを妨げている「裏切り貴族」の手から自分を解放してくれるはずであった。プガチョーフは民衆のこのツァーリ幻想を利用すべくピョートル三世を名のって民衆に忠誠を求めたのである。

これに応えて、民衆は「新たに出現したピョートル三世」が「真の、良き、強いツァーリ」であり、彼らを解放するに足る力を備えているのだということを信じこもうとした。反乱中に流れた多くのデマは、そのことを証するものである。民衆はデマにおいて「ピョートル三世」に「良きツァーリ」としてあるべき価値（真正、強力）を附与し、彼を途方もなく理想化した。そうしておいて、彼らはこの「後光のさす魔術的救い主」にすがりさえすれば、自分の宿望が達成できると考え、その旗下に加わったのである。このようにして、反乱への大動員が可能となった。

しかしながら、この「解放者＝ツァーリ」に頼ろうとする態度は民衆の反乱への受動的参加、他力本願的行動傾向を招来し、彼らを「消極性の罠」にはめることとなった。民衆は、実際には自分の身一つさえ解放しかねるような一介のドン・カザーク（プガチョーフ）に全ロシア解放の夢を託し、自分はあくまで解放さるべき客体にとどまろうとしたのである。ここにおいて、ツァーリ幻想は民衆を致命的な誤謬に導く。全ロシアを解放する真の主体とは、国民の九六パーセントを占める農民＝民衆をおいて他にはなかった。個々の村落が局地性の殻を破って有機的に連合し、単一の農民勢力となって支配者＝貴族を打倒することによってのみ彼らの解放は現実のものとなるの

である。しかるに、ツァーリ幻想は、このような主体的・自覚的な反乱者が誕生するためには甚だ不利な状況を形成した。民衆が自分達の解放の可能性を大きなものにしようとして「良きツァーリ」に幻想を抱き、これを偉大な存在に祭り上げれば上げるほど、真正の解放主体たる自己の役割は矮小化されていったのである。解放を求める民衆の願望が生みだしたツァーリ幻想は、反乱中の民衆の消極的行動傾向を生み、このことが政府軍と比べての反乱軍側の戦力的弱体、組織・通信手段の不備と並んで反徒を敗北に導いたのであった。

注

(1) 《Документы ставки Е.И.Пугачева, повстанческих учреждений 1773-1774 гг.》(以下《Документы ставки》と略), М., 1975, стр. 202.

(2) 「ツァーリ幻想」という概念は、レーニンが「素朴な君主主義(наивный монархизм)」という用語で定式化して以来、ソビエトの史学界で一般化したものである。現在でもソビエトの研究者の多くはこの「素朴な君主主義」という用語を用いているが、それ以外にも「ツァーリ幻想(царистские иллюзии)」、「ツァーリ主義的傾向(царистская направленность)」、「『良きツァーリ』に対する信頼(вера в《хорошего царя》)」といったような言い方もある。わが国においては「ツァーリ崇拝」、「ツァーリ信仰」、「ツァーリ幻想」などの用語が使われることが多い。本稿のテーマに関するソビエトの研究については、論文集 Крестьянские войны в России XVII-XVIII вв. М., 1974 巻末の(стр. 432-444) ビブリオグラフィーおよび И.З.Кадсон и В.В.Мавродин. Советская историческая литература о классовой борьбе крестьянства в феодальной России.——《Вестник Ленинградского университета》, 1979, No. 8, стр. 16-21 を参照のこと。なお、ツァーリ幻想の問題を民俗学、宗教史の立場から研究したものとしては、それぞれ К.В.Чистов. Русские народные социально-утопические легенды XVII-XIX вв. М., 1967, А.И. Клибанов. Народная социальная утопия в России. период феодализма. М., 1977 が有益である。

(3) 阿部重雄『帝政ロシアの農民戦争』（吉川弘文館、一九六九年）、田中陽児「『ロシア農民戦争』論の再検討――ソビエト史学の新動向をめぐって――」（『ロシア史研究』二二、一九七四年）、和田春樹『農民革命の世界――エセーニンとマフノ』（東京大学出版会、一九七八年）、土肥恒之「一六・一七世紀北ロシアの修道院と農民闘争」（小樽商科大学『人文研究』五九、一九七九年）等を参照。なお、プガチョーフが僭称を決意するにいたるまでの経過については、八重樫喬任「プガチョフ農民戦争における僭称問題によせて（上・下）」（『岩手史学研究』六一・六二、一九七六・一九七七年）に詳しい。

(4) М. Т. Белявский. Крестьянская война 1773-1775 гг. и ее особенности.――《Вестник Московского университета》, 1974, No. 4, стр. 75-76.

(5) В. В. Мавродин. Крестьянская война в России в 1773-1775 гг. Восстание Пугачева. Т. I, Л., 1961, стр. 417.

(6) Л. В. Черепнин. Об изучении крестьянских войн в России XVII-XVIII вв.《Крестьянские войны в России XVII-XVIII вв.》. Сборник статей. М., 1974, стр. 11.

(7) Е. И. Индова, А. А. Преображенский, Ю. А. Тихонов. Народные движения в России XVII-XVIII вв. и абсолютизм.《Абсолютизм в России》. М., 1964, стр. 77.

(8) К. В. Чистов. Указ. соч., стр. 138.

(9) 農民の考えによれば、貴族がツァーリから土地と農民の所有を認められているのも、文武の勤務を負う代償としてなのであり、その勤務義務が解除された以上は、貴族が農民を所有する根拠もなくなり、農民の解放が実現するはずであった。

(10) К. В. Чистов. Указ. соч., стр. 138-140.

(11)《Документы ставки》, стр. 45.

(12) Н. Дубровин. Пугачев и его сообщники. Т. III, СПб., 1884, стр. 166.

(13) アラートウィリの周辺だけで銅貨二万七千枚がばらまかれた。(С. П. Петров. Пугачев в Пензенском крае. Пенза,

1956, стр. 70)。

(14) 《Документы ставки》, No. 1, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 13, 15, 16, 18, 22, 24, 25, 39, 41.

(15) Там же, стр. 47.

(16) М. Д. Курмачева. Об участии крепостной интеллигенции в Крестьянской войны 1773-1775 гг. 《Крестьянские войны в России XVII-XVIII вв.》. Сборник статей, М., 1974, стр. 312.

(17) 帝政ロシア時代には、ゲールツェンの如き、プガチョーフの乱を分離派の反乱とみる見解もみられたが、現在のソビエト史学界では乱における宗教的契機の過大視をいましめる声が支配的である。

(18) 《Документы ставки》, No. 9, 10, 11, 13, 15, 18.

(19) Там же, стр. 42.

(20) М. Т. Белявский. Указ. ст., стр. 66.

(21) К. В. Чистов. Указ. соч., стр. 167-168.

(22) 《Следствие и суд над Е. И. Пугачевым》.——《Вопросы истории》, 1966, No. 4, стр. 117.

(23) 社会心理学においてはデマなる用語は厳密には伝達者が何らかの宣伝意図をもって流す性質のものについてのみ使用され、そのような意図的情報操作を目的として流されたのではない場合には流言という語が用いられる。ただし本稿では両者を統一してデマと呼んでおく。なお、デマの性質については、G・W・オルポート、L・ポストマン共著『デマの心理学』、南博訳（岩波書店、一九五二年）、相場均『うその心理学』（講談社、一九六五年）、H・キャントリル『火星からの侵入』、斎藤耕二、菊池章夫共訳（川島書店、一九七一年）、清水幾太郎『流言蜚語』（岩波書店、一九四七年）等を参照のこと。特に最後のものはプガチョーフの処刑にまつわる伝説の展開をとりあつかっており興味深い。

(24) Н. Дубровин. Указ. соч., Т, II, стр. 224.

(25) Там же, стр. 195.

(26) М. Д. Курмачева. Указ. ста., стр. 312.
(27) Н. Дубровин. Указ. соч., Т. III, стр. 56-57.
(28) Там же, стр. 291.
(29) 《Документы ставки》, стр. 242.
(30) Там же, стр. 188.
(31) Там же, стр. 314.
(32) Там же, стр. 334-335.
(33) 《Крестьянская война 1773-1775 гг. в России》. Сборник документов. М., 1973, стр. 206.
(34) 《Документы ставки》, стр. 247, 273, 305. Н. Дубровин. Указ. соч., Т. II, стр. 391.
(35) 民衆の意識においては、貴族が自分たちを苦しめるのは彼らがキリストの教えに背いているがために他ならなかった。たとえば、反徒の一人グリャズノーフがチリャービンスクの住民にあてた呼びかけにおいて述べた如く、「貴族は、神の法において定められているように農民を自分の子供として所有しているのではない。彼らは農民を働き手としてしか考えていないばかりでなく、兎を追う猟犬より劣ったものとみなしている」のであった（《Документы ставки》, стр. 271）。
(36) Там же, стр. 353.
(37) 《Пугачевщина》. Сборник документов, Т. III, М.-Л., 1931, стр. 57, 58, 107, 150, 159, 192, 216.
(38) А. И. Андрущенко. Крестьянская война 1773-1775 гг. на Яике, в Приуралье, на Урале и в Сибири. М., 1969, стр. 268.
(39) В. В. Мавродин. Указ. соч., Т. II, стр. 269.
(40) 《Документы ставки》, стр. 346.
(41) Там же, стр. 347.

(42) Н. Дубровин. Указ. соч., Т. Ⅱ, стр. 257.

(43) Там же, стр. 259.

(44) Там же, стр. 325.

(45) 《Документы ставки》, стр. 185.

(大学院学生)